

二種の「テアエテーツス」

長 澤 信 壽

プラトーンの對話篇は所謂哲學の専門家のために書かれたのではなく、普く教養のある人達に訴へて、哲學に關心をもたせるために書かれたものであらうと言はれてゐる。それ故に彼の對話篇は所謂専門家の研究の對象として専門家によつてのみ讀まるべきものではなくして、およそ教養を志す全ての人々によつて讀まるべき教養のための書物である。而してそのためには我々は立派な邦譯を必要とする。幸にも既に我々はさういふ翻譯を數冊もつてゐるが、輒近更にプラトーンの對話篇の中でも重要な地位を占むる「テアエテーツス」の邦譯が二種公刊せられたことは、希臘哲學乃至文化に特別の關心を有つ者にとつては固よりのこと、然らざる者にとつても慶ぶべきことであらう。その二種といふのは、田中晃氏譯の「テアイテーツス」(同文書院刊行)と、田中美知太郎氏譯

の「テアイテーツス」(岩波書店刊行)とである。兩者は多少の優劣や一長一短をまぬかれないとしても、熟れも眞摯な、極めて良心的な態度をもつて翻譯せられたものであつて、筆者はこの兩譯を併讀して啓發せられるところが決して少くはなかつた。それ故に爰にその兩譯を紹介し、閱讀の際に感じた二三の點に就いて語りたいと思ふ。同じ對話篇の翻譯を兩氏が殆んど同時に公にせられたばかりではなく、兩氏の姓も亦同じ田中である。それ故に以下混同を避けるため、兩氏には甚だ失禮であるが、一方を晃氏、他方を美知太郎氏と呼ぶことにする。

プラトーンがこの對話篇を書いたのは彼の六十歳乃至六十一歳の頃、大體紀元前三六九年から同三六八年前後であらうと推定せられるのであつて、「國家」よりも後、「ソピスタ」よりも前と見るのが、今日では先づ定説とな

つてゐると言つて差支ない。若し我々がプラトーンの哲學の發展を前期と後期とに二分するならば、この對話篇は「バルメニデース」と共に後期の始まりに屬するものである。「テアエテ羅斯」がかくの如く前期と後期とを結合する結目であり、またその分岐點であると言ふことは、この對話篇を正しく理解するためには、他の諸篇にもましてその前後の諸篇乃至プラトーン哲學の全般的な理解を要求する。と言ふのはここに問はれてゐる問題、語られてゐる思想、或は用ひられてゐる言語でさへ、しばしば何等かの意味で深い係りを前期の諸篇に對して有ち、また後に發展すべき萌芽を含んで居り、その上、同じ言葉が異つた意味に、異つた言葉が同じ意味に用ひられてゐる場合があるからである。若し人がこの前後の諸篇に對する連關と彼の哲學全般との理解に缺くるところがあるならば、その結果は譯文の上にとつて誤解や意味の不徹底となつて現れ、若しくは譯者自身正しく譯したつもりであるても、讀者の側に往々誤解を生ぜしむる原となるであらう。プラトーンは、この時期に於て、それまでに彼が幾度も論じた問題を新たに取りあげたのである。こ

の對話篇は古來「一名、知識に就いて」と言ふ副名で呼ばれてゐるやうに、「知識とは何であるか」と言ふ問題をその主題とするものであるが、この問題も、既に我々が前期の諸篇に於て幾度も遭遇したものであつて、決して當篇に於てはじめて取りあげられたものではない。しかし若し人がこの對話篇に、「知識とは何であるか」に關するプラトーン自身の決定的解答とか定義とかを期待するならば、失望せざるを得ないであらう。何となればここにかかる解答や定義を積極的に與ふることはプラトーンの意圖ではなかつたからである。却つて彼の企圖は知識に達すると考へられてゐるところの道を吟味することにあつた。彼が對話の主役ソークラテースをして「神から」與へられた産婆術を幾度も強調せしめてゐる理由は即ちここにあつたのである。かくしてソークラテースの産婆術は「批判」の役をつとめる。そして「知識とは何であるか」に關する三つの提案がそれぞれ順を追ふて批判される。その第一は知識をもつて感覺となすもの、その第二は眞なる臆斷ディカとなすもの、その第三はロゴスを伴ふ眞なる臆斷となすものである。しかし吟味の結果は、これら孰れを

も知識とは何であるかと言ふ間に對する完全な解答となすことを許さない、「従つて、知識であるのは、テアイテトス、君のいふ知(感)覺でもなければ、また眞なる思ひなし(臆斷)でもなく、さうかといつてまた眞なる思ひなし(臆斷)に言論(ロゴス)の加はつて出来るものでもないと言ふことになるだらう(美知太郎氏譯による)。かくしてこの對話篇は積極的に知識とは何であるかを示すことなく、「バルメニデース」の巧妙なるアボリア論法を想はしむるところの否定的結果に達してゐる。上記三つの提案の吟味を終つてから、ソークラテースは、メレトスによつて起された告訴の辯明をなすべき時が来たことを二人の對話者テアイテトスとテルプシオンとに告げ、翌朝早くもう一度會ふことを約して立ち去るのであるが、去るにあつて彼は「僕の技術がなし能ふところのものは、ただそれだけのことなのであつて、それ以上はなんにも出来ないのだ」と言つてゐる。これがこの對話篇の結語である。

知識説の三つの批判はこの對話篇を貫いてゐる主流であるが、プラトーンの對話篇が常にさうであるやうに、

本篇も亦しばしばこの主流から離れて、一見したところではそれと何等の脈絡をも有つてゐないやうな多岐な問題に亘つて問答を重ね、一方では對話をして自然ならしむると共に、他方ではその構造に複雑性を與へてゐる。主題となつてゐるところの上記三つの定義は、謂はばこの複雑な構造を支へてゐる樞軸であつて、この對話篇に

盛られてゐる複雑多岐な問題も、結局、この樞軸から發し、この樞軸に戻つて來るところの支流である。これら支流をなすものうち我々は先づ天折せるテアイテトスの追憶の意味をも有つ無理數論をあげなければならぬ。その他ソークラテースの産婆術の意味の解明、プロタゴラス説の解釋、ヘーラクレイトス説とバルメニデース説との比較對照、眞の哲學者と修辭家及び政治家との峻別、把握し難い「ロゴス」と言ふ言葉の解釋等々は、その最も重要なものである。このやうな話題が悠揚せまらざる態度をもつて對話せられてゐる。そしてこの餘裕にプラトーンは奴隸育ちの人から區別せらるる自由人の學問探究の道を見るのである。

次に兩氏の譯に就いて一言しよう。翻譯のむづかしさ

は周知のことであるが、就中、古典の譯は特に至難の業である。取り分けてプラトーンの對話篇を國語に移植する場合には、他の古典には餘り伴はぬところの困難が伴ふ。それは先づ第一に對話であることに原因する。對話中の人物の間の親疎、上下、年齢等々が一通り明かにならぬかぎり、複雑な敬語や語調をもつ國語の談話體に移すことは困難である。而も如何なる程度の談話體を用ひて翻譯するかは、譯文全體の調子とか、對話篇全體が讀者に與ふる印象とか、更に對話者の人柄に就いての讀者の構想力のはたらきとか等々に、著しい相違を來すからである。今ここに兩氏の「テアエテーツス」巻頭の、エウクレイデースとテルブシオンとの對話を數行引用してそれを例示しよう。

エウ お、テルブシオン、丁度いま田舎から歸つて來たところかね、それとももう大分になるのかね。

テル 少しばかり前だ。僕はまた君を市場アゴラで探してゐるのだが見つけることができなかつたので不思議に思つてゐたのだよ。

エウ いや街にはゐなかつたものだからね。

テル では何處に。

エウ 波止場の方へ下つて行つてゐたらテアイテートスに出會してね、コリントスの軍營からアテーナイへ送還されてゐるのにね。

テル 生きてか、死んでか。

エウ 生きてだ、だがやつとのことであら、數個所の負傷のためにむつかしいのだ、が、なほ悪いことには軍隊でおこつた病氣にやられてゐる。

(見氏譯・五一頁)

エウクレイデス 丁度いま、テルブシオン、君は田舎から來たところなんですか。それともさつきから？。

テルブシオン え、かなり前から來てゐたのです。

それに、貴君をアゴラアゴラ中探してゐたのですが、見あたらないので、をかしいと思つてゐたのです。

エウク それはその筈ですよ、京中探したつて僕はゐなかつたんですから。

テルブ おや、すると一體どこにゐたんです。

エウク 港へ降りて行くわけだつたんですがね、途中

でテアイテトスに出會つたのですよ。コリントスから陣地を離れて、アテナイへ運ばれて行くところでした。

テルブ 運ばれてですつて？ それは生きてゝないので、それとも、もう亡くなつてしまつてのことなのですか。

エウク 生きてゝなのですが、それこそもうやつと生きてゐるといふだけのことでした。何しろ、創まを何か受けてゐて、それだけでもむつかしいのに、軍隊の中に發生したあの病氣にやられて、むしろその方で一層いけなくなつてゐるんですからねえ。

(美知太郎氏譯・五頁以下)

譯文の巧拙は一應除外するとしても、見られる通り兩氏の譯文では、エウクレイデースとテルブシオーンとの言葉遣には可なりの相違がある。即ち美知太郎氏の譯ではエウクレイデースとテルブシオーンという言葉遣が、兎氏のそれに比してより丁寧になつてゐる。言葉遣のこの相違は、本論に入つて、ソークラテースとテオドロスの對話にも見られるものである。これらの對話者がどんな

間柄であるかを考慮に入れて讀む讀者が、兩氏の譯文から夫々その親疎や年齢等に就いて受ける印象には、相當の逕庭がある。ところが先づエウクレイデースとテルブシオーンとがどんな間柄であつたかは、明かでないのであつて、我々が知り得ることは、ただ「バエドール」に於て、二人が共にソークラテースの臨終に居合はした仲間として描かれてゐることだけである。それ故に我々がその間柄に就いて抱く想像は、譯文に用ひられてゐる言葉遣から受ける印象によつて、少なからず左右せられるであらう。

*譯文の引用箇所は兩氏とも夫々二三註を附して居られるが、差當り關係がないから省略した。序に一言するならば、*παρὰ τὸν* が兎氏の譯では「街にば」となり、美知太郎氏の譯では「京中探したつて」となつてゐる。兎氏の「街」は何と讀ませるつもりか知らないが、大部分の人は恐らく、「トホリ」と讀むであらう、そしてさう讀み、さう解するのがこの譯語の正しい讀み方である。しかし希臘語の「ホリス」にはトホリと言ふ意味はないし、ここでも無論さう言ふ意味に用ひられてゐるのではない。また美知太郎氏が一方では「アゴラー」を寫音して註釋でその意味を解説する方法をとりながら、ひとしく國語に移しがたい「ホリス」を「京」と譯したのは、どういふ

意向からであらうか。「京」が宮處みやとこの義であるとすれば、希臘語の「ボリス」とは凡そ縁が遠いであらう。このほか氏の譯文中には既に固定し、若しくは固定しかけた譯語を拒けて、故ら氏獨特の譯語をあてられたものがある。固よりそのうちには極めて適正なものもあるが、例へば「ピロソボス」を「好學求智の士」と譯された場合の如く(一七五e・岡氏の譯では一五〇頁)、なるほど譯語そのものを取つてみれば不適當でないかも知れないが、却つて誤解を招き、角を矯めて牛を殺す結果となるであらう。また「眞實の思ひなしに言論の伴ふも」と言ふ譯語も、その一々の語をとつて見れば少しも無理はないが、「ドクサ・アレテース・メタ・ログウ」といふ句を知らない者が、この譯語に遭遇して、直截にその意味を把握することが出来るかどうかは甚だ疑問である。

美知太郎氏はテオドロースとソクラテースとの言葉遣に就いて「譯者註」(三二六頁)で次のやうに述べてゐる。「従つてテオドロースの生年は多分たゞ五〇〇年位から四七〇年位までの間といふ不定のことが言へるだけなのである。この譯書では然しソクラテースより多少年上ではあるが、餘り大した年齢上の差のない人物として取扱つてある。なほこの兩者の言葉つかひに就いては、教養人としてテオドロースもソクラテースも、あまり型に嵌つた

老人言葉など用ゐるさせない方がよいと譯者は信じたので、會話は出来るだけ普通の調子に譯しておいた。」エウクレイデースとテルブシオンとの言葉つかひも、美知太郎氏は同じ主旨から、同じやうな準備のもとに譯出せられたものと思ふ。晁氏の場合は、どういふ見當の下に文體を選ばれたか不明であるが、その卷頭に附せられた凡例の中で「原典に忠實なると共に邦語としても流暢ならむことを」志し、「ただ古典の品位を失ふを畏れたが故に、あまり卑俗なる口調を用ゐることは許されなかつた。」と言つて居られる。氏の譯が如何なる意味で原典に忠實であり得たかは検討を要するが、「……かね」といふ疑問を表す語尾や、「だがやつとのことであらう」と言ふ言廻しは「卑俗なる」響きを人々に與へはしないであらうか。

以上は「テアエテース」第一頁の數行を讀んで感じたことの一端に過ぎないが、筆者自身もプラトーンを讀むたびにその對話が當時の語られた言葉そのままのものであるか否か、或は語られた言葉とどれほどの距離をもつものであるかに就いて常に疑問をもつてゐる。今日残つてゐる希臘語の文書は全て書かれたものであるから、實

際に語られた希臘語がどのやうなものであつたか、またそれがプラトーンの對話篇に用ひられてゐるものと、どのやうに、且つどの程度に異つてゐるかは、實證的に知ることとは困難であつて、結局臆測の範圍を出ないものであらうと思ふ。他方プラトーンは高い詩的教養を有し、彼の用ひた語彙は悲劇詩人のそれと密接に關係してゐるたが、大體に於てアテーナーエの教養のある人々の會話の調子を出すことに彼は骨を折つたと言はれてゐる (A. Mailet, *Aperçu d'une histoire de la langue grecque*, 2^e édition, p. 166.)。美知太郎氏が譯文の全體に亘つて會話の調子を出すことに骨を折り、特に台詞の受け渡しに細心の注意を拂はれてゐることは、上に引用したところを見るだけでも充分知られると思ふ。人は原文に忠實と言ふことを直譯とか逐字譯と言ふ意味に解してはならない。美知太郎氏の譯文は、所謂直譯ではなく、場合によつては可なり碎いた説明譯になつてゐるが、しかも極めて原文に忠實であつて、その忠實さに於て決して兎氏の譯に劣るものではない。就中譯出し難いとせられてゐる不變化詞を、綿密周到なる用意の下に、極めて巧妙に譯

出せられたことは、從來公にせられた如何なる翻譯に於ても、曾て見られなかつたものであると言つても恐らく過言ではあるまい。人は如何なる頁を開いても、適確にして巧妙なる不變化詞の譯語を拾ひあけることが出来るであらう。而してそれはひとしく巧みに譯出せられた動詞の法（モード）と相待つて、會話體の譯文に生々とした精彩を興ふると同時に、對話者の志向とか氣もちとかいふものを如實に躍動せしめてゐる。また筆者はその一々の場合をあけることを控へるが、希臘語に於ては極めて自然に用ひられるが、他の國語には移し難い呼びかけの言葉に就いても非常な苦心が拂はれてゐる。一例をあけるならば、一六五dに出て来る *καταρα* は、「何と驚くことではないか、君！」（一〇七頁）と極めて自然に譯されてゐる。ところがこれを兎氏の譯についてみると、「お、偉者」（一三五頁）となつてゐる。おそらく「エラモノ」と讀ませるのであらう。更に同じ言葉が「クリトーン」四八りに用ひられてゐる時に、或る人々は實に「妙の人よ」と譯して「タウマジエ」とルビを附してゐるのである。これは單に一つの單語の譯の巧拙の問題を超えて、我が國に於ける

希臘語研究の發達を象徴するものである。その他美知太郎氏の譯の勝れてゐる點を、例へば適正なる譯語、曖昧な箇所の明快な解釋等を、人は數多く數へあけることが出来るであらう。氏は語を語に移すよりも句を譯した。

しかし含蓄的な希臘語の單語の意味や色調ニユアズを傳へるために、譯文では原文の一語が數語になり、そのためにしばしば挿入句が非常に多くなつた。國語の現代文は外國語に比して遙かに挿入句を用ふことが少ないが、取分けて會話に於てはさうである。單に原文の挿入句のみならず、原文の單語が挿入句の形をとつて譯文に表はされざるために、氏の譯だけを讀む人にはおそらくその意味を端的に捉へることが出来ない場合が往々にしてあらう。例へば二〇九d(同氏の譯では三一〇頁)は次のやうに譯せられてゐるが、これを讀んでこの日本語だけでその意味を誤りなく理解し得る者は極めて少ないであらう。「つまり、それが吾々に命じてゐるのは、吾々がそれについて、何處のところでそれが他のものから分れて別になつてゐるかの、正しい思ひなしを所持してゐるところの、そのものに就いて、それが何處のところで他のものか

ら分れて別になつてゐるかの、正しい思ひなしを更に加へて把握するやうにせよといふことなのである。かういふ箇所は他にもあつたが、然らざる場合にあつても、原文の簡素は失はれて冗長となり散漫となつてゐる。プラトーンの用語が日常の語られた言葉にどの程度に接近してゐたかの疑問に就いては澁に述べたが、恐らく日常の談話體に接近せしめたい意向から、關東地方の方言かと思はれる促音を盛んに用ひて、「同意するだらう、つて、こと」とか「註文してゐるんぢや、あないつて」とか「……ひつ、絡つて來て」とかいふ譯語を用ひ、或は「水の淺い深いは、渡つてみれば、水」そのものが、つまり、はつきりさせてくれるだらう」といふ奴、んで……」とか「よし、來た」(圈點は筆者が附したものと)とかいふやうな言葉遣は、模範的希臘散文と稱せられるプラトーンの文章を移すにふさはしい國語であらうか。我々の日常の言葉が實際喋られる時に促音が入るからと言つて、或は「んぢやあ」といふ音が響くからと言つて、それをそのまま寫音する必要は毫もないのである。それは *obscure* が時には「デアレクテケ」と寫音せられても差支ないと同然である。

而も當時七十歳の「古今の學說を縱横論評する大智識」と氏が言つてゐるソークラテースがそのやうな言葉を用ひて、「知識とは何であるか」を語るることになつてゐるのである。更にさういふ言葉の直ぐ次に「それによつて自ら吾々の求めてゐるところの……」といふ言ひ廻しが來ることはいかにも不調和である。

以上私は内容の解釋よりも主として翻譯の技術の方面から論評した。解釋に關しても筆者は氏と意見を異にするところもあり、また傳統的と言つてもよい説に反してゐるところもあるが、これは筆者の側に於ても今後充分研究して見たいと思つてゐる。しかし綿密細心なる注意をもつて徹底的に究明せられた美知太郎氏の解釋に對しては、何人も信賴することが出來、その解釋を探ると探らぬとに拘らず、一應氏の主張に耳を傾くべきであらう。氏の翻譯に附せられた註釋は、この對話篇に關するほとんどあらゆる文獻を涉獵して、本文批評並に内容解釋の兩方面に互つてなされたものであつて、筆者の狭い知識の範圍では、單に量の上から言つても、これほど詳密な註釋は未だ何處に於ても公にせられてゐないやうである。

固よりこれほど詳細な註釋は、單に翻譯だけを讀む讀者には不要であるかも知れないが、氏も恐らく原文を讀む人々の理解を助けることを目的とせられたものであらう。不變化詞の譯し方などに就いても煩を厭はず一々その據り處を指示せられてゐる。卷末の註釋の龐大なものにして卷頭の「序説」は不釣合に簡單であつて、僅々十頁ばかりに過ぎないが、當篇の内容を明快に解説せられた名文である。

上來私は氏の譯を晃氏の譯にしばしば比較したが、比較といふことが嚴密には同質のものに於てのみ可能であるとすれば、この兩者は比較せらるべきものではなかつたかも知れない。何となれば兩氏の譯の相違は單に學力の差異に基くものではなく、むしろそれはまさに質的相違だからである。このことほどの一頁を開いてみても例證せられるが故に、筆者が敢て爰にその例證を示す必要はないであらう。我々が與へられたのは、二種の「テアエテテス」であつて、二つの「テアエテテス」ではない。美知太郎氏の譯文の意味が明確を缺く場合は、前述の如く、冗長に過ぎる、時には挿入句による、譯出法

に原因するが、晁氏の場合には原文に對する理解の不足若しくは誤讀に因る場合が多い。その中には少し注意すれば避け得たであらうと思ふものさへ見られるのである。と言つて私は晁氏の譯が蕪雜な不眞面目なものであると言ふのでは毛頭ない。多少の瑕瑾はあつても、それらは容易に訂正し得るものであつて、簡素な譯文は場合によつては却つて美知太郎氏の譯よりもたやすく要領を得せしむるであらう。古典の翻譯はただ一つあればよいといふものではない。ポーブのホメーロスと並んでクウバアのそれもブチャーのそれも存在する理由があると同じやうに、美知太郎氏の文獻學的に勝れた翻譯と共に晁氏の簡素な夫れも亦存在の理由をもち得るものである。而して讀者はこの兩方を併讀することによつて得るところが多いに相違ない。

(二三・八・一二)